The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	遠藤周作『わたしが・棄てた・女』論 : 「ぼく」の〈平凡さ〉に着目して
Author(s)	アナンド, サンチット
Citation	語文. 2015, 104, p. 45-61
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70955
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

遠藤周作『わたしが・棄てた・女』論

――「ぼく」の〈平凡さ〉に着目して――

アナンド・サンチット

一．問題の所在

『わたしが・棄てた・女』は一九六三年一月から一二月まで雑誌『主婦の友』に連載された作品である。約二年半も続いた遠藤周作の入院生活が終わってから、初めての長編小説である。死に直面し、回復直後に書いた作品であるため、相当の想いを込めて書かれた作品であることが推測できよう。本作品で取り上げられたテーマは遠藤の最後の作品まで響き続ける。例えば、作品内の中心的存在になる人物の棄てる・棄てられる関係は最後の作品、『深い河』、とりわけ大津と美津子、まで度々描き続けられる。また、一人の主人公がもう一人を棄てるにもかかわらず、自ら探しに行く、またその生き方から何かを学んだり、眼を向けたりする構図も『深い河』のような代表作にまで活かされている。一例を取り上げると、『深い河』の美津子が「わたしは、なぜその人（注：大津）を探すのだろう」というように『わたしが・棄てた・女』の「ぼく」もミツを「みつけてほしいんですよ」と人に尋ねるのである。同様に、美津子に大津の「馬鹿な生き方」が「なんだか馬鹿でないように見えてきました」とあるが、「ぼく」も「ミツがぼくに何か教えたとするならば」とミツに何かを教えてもらったことを認めざるを得ないのである。

一九九四年に本作品が「音楽座ミュージカル」により『泣かないで』という題名で出演される際に、作家自身が「その後の私の小説には、何度も森田ミツが登場します」[1]と述べている。このように本作は遠藤周作の文学を方向付けるともいえる重要な作品の一つである。

『主婦の友』の一九六二年一二月号の「作家のことば」[2]に次のような発言がある。

だからぼくは、今度の小説で我々と同じように平凡な普通な人間だったが、そこから彼女自身も予想しなかった感動的

な世界に入っていった一人の女性の話を、みなさんと追っていきたいと思います。

連載が既に決まっている一九六二年、一二月の時点でこの作品の題名は「さようなら」となっていた。もし、作品の題名を作品を読むヒントの一つとするならば、まだこの時点で作者のフォーカスは「さいなら」と呟いて死ぬミツに留まっているといえよう。しかし、翌月の一九六三年、一月になると、作家が思い切ってこの作品の題名を『わたしが・棄てた・女』に変更している。当時で、女読者向けの『主婦の友』という雑誌であるにもかかわらず、相当な勇気を出してこの題名を選んだのは、それだけこの題名がこの作品の核心を掴んでいると作家自身が考えていたからであろう。当然のことながら、当時、読者の怒りを買うことにならざるを得なかった。

「ところが、題名が題名だったため、最初は読者から抗議が殺到。「祖母の代から読んでいるが、こんな淫らな連載を載せるなら購読をやめる」という人まで出た[3]」ので、五月号に遠藤からさらに次のような言葉が載せられている。

「わたしが・棄てた・女」という題名や、今までの内容のため、あるいは気分を悪くされた読者がいるかも知れません。（中略）もう少し辛抱して、「ぼく」と「ミツ」の生き方を見て下さい。

とあるが、連載が始まる直前、十二月の時点で「一人の女性の話を、みなさんと追っていきたい」と発言した作家自身がこの作品における「ぼく」の存在も次第に大きくなっていることを看過できなかったのであろう。

さらに、「國文學」一九九三年九月号に掲載された加賀乙彦との対談「最新作『深い河』―魂の問題」で、遠藤が「わたしが・棄てた・イエス」あるいは「人間が・棄てた・イエス」というダブルイメージが書き込まれているということからも、一人の主人公に一方的に傾いているのではなく、棄てる側・棄てられる側、双方の役割・関係を重視していることがわかる。

本作は戦後すぐの東京を舞台にしており、吉岡がミツと出会う一九四八年の秋からミツが死んだことを修道女の手紙で知らされる一九五二年までの出来事を、連載がされている一九六三年現在での吉岡が回想する「ぼくの手記」（以下「手記」）と全知視点の語り手が語る「手の首のアザ」（以下「アザ」）からできている。「手記」の大部分が回想であるため、約十年前に出来事が始まる時点と「手記」を記し始める時点（以下現時点）との間を自由自在に行き来している。

先行論では、吉岡に関しては彼が「僕の手記（一）」でミツを聖女と考えており、彼の認識におけるミツの聖女化へ至る経緯を「ぼくの手記（七）」までで示すが、彼のミツを棄てたことに対する〈罪意識〉を考察するものが多い。それは、フランスへ留学中に付き合っていたフランソワーズを結果的に棄てた遠藤自身の分

身として吉岡を捉える傾向があるからであろう。「吉岡努は遠藤にとって他人ではなく、罪の意識を共有する血縁にほかならない」[4]や「この「男」（発表者注：吉岡）の〈心〉を刺し貫いた〈罪の感覚〉[5]」や「「しかしこの寂しさは何処からくるのだろう」という呟きは、吉岡努が自分の犯した罪を感知したことを証明するものではないだろうか[6]」や「「僕の手記」（七）はこのあとつぎのような「ぼく」の告白調の文章で閉じられるのだが、私はその文章の背後に、遠藤周作氏の顔を感じずにはいられないのである[7]」等というように吉岡の分析をする際に彼の「罪」を意識しているところにフォーカスを絞る先行論がその例に当たる。

確かに作品内に「誰だって……男なら、することだから。俺だけじゃないさ」と自分の行為を正当化するような発言はある。が、現時点で「とは言え、ぼくは人並以上に自分が腹黒く、狡猾な男だったとは思ってはいない」や「しかし、そんなひどい人間でもなかった」という「ぼく」の発言は罪意識を伴っているとは言い難い。もしも、ミツのことを聖女や理想の女と思うようになり、さらに罪意識のため、「男ならば大半は形こそちがえ、一度か、二度は経験のあることだろう」のような弁解の言葉を述べているとするならば、現時点での「ぼく」がそのような発言をしないのではないだろうか。さらに、吉岡が実際に罪を意識し、「手記」を書いているのであれば、冒頭の部分からやや冗談めいた文体で「手記」を書き始めるのは不適切と考えられる。もちろん、「手記」を記して行く中で罪意識が浮上する可能性は否めないが、本論においてそのように考えない理由を第四章に触れるようにする。

実際に吉岡にミツに対しての罪意識があるかどうかを確認するため、吉岡の手記内の出来事が始まる時点から手記を記し始める現時点までの認識変化を考察する必要がある。また、吉岡のミツに対する認識を作品から読解する際に、ミツ自身を考察することによって、吉岡の認識変化の真実性が明らかになろう。そのため、吉岡はもちろん、その関係におけるミツも考察したい。

二、ミツに対する吉岡の認識変化

貧しい大学生活を送っている吉岡と長島がともに葡萄つみの娘たちのことを考えながら「ゼニコがほしい、オナゴがほしい」と溜息を洩らす。小児麻痺をわずらった「ぼく」がバイトのために「あんまりまじめ」じゃない金さんのところにいく。そのバイト中に見つかった古雑誌がミツと出会う切っ掛けになる。初めてミツに出会ったとき「この女の好意を自分の欲望のために利用すれば、俺は最低な人間になる」と思いやりの心を持っている「ぼく」は、ちょうど一週間後に二回目の逢引でミツを「ものにして」しまうが棄てて、「やらない奴は今の世の中じゃ損をするのさ」や「断じて出世する」と自分に聞かせながら世渡り上手な生き方を選ぶ。一週間前までの「ぼく」と違って、「最低な人間」になっても損得の考えを重要視している。つまり、「ぼく」はこの一週間である種の変化を起こしている。

さらに、回想内の出来事として、一番最後にミツの死がスール

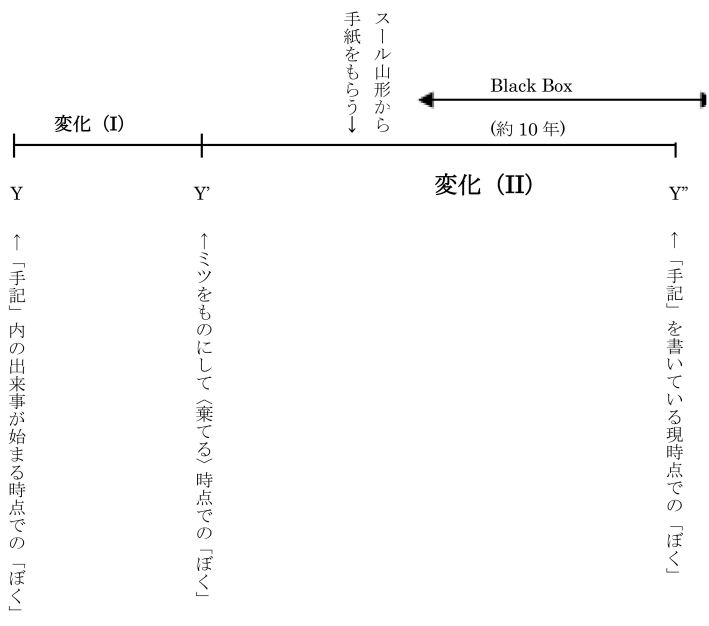

図 1

山形の手紙で知らされ、それから長い年月が経ち、現時点で「ぼく」は「あの女を聖女だと思」うようになる。つまり、ミツのことを「赤の他人」から「聖女」と思うようになる吉岡の認識に明らかな変化がみられる。このような変化がなぜおこったかを理解するために「手記」の出来事を時間軸に沿って二つに分けて考察する。（図1を参考）

その一つ目（変化Ⅰ）は手記内の出来事が始まる時点からミツを棄てるまでの出来事である。つまり、YからY'に変化するまでの「ぼく」である。次は（変化Ⅱ）、スール山形から手紙をもらい、現時点に至るまでの「ぼく」、つまり Y'になるまでの「ぼく」である。もちろん、ミツを棄ててから彼女の死が知らされるまで約三年程度空くが、その時もミツのことを考えたり、追いかけて行ったりする。「あのころ、たった二度ほど」ミツのことを思い浮かべ、「なぜ、もう少しうまく俺のように毎日を渡れないんだろう」とミツのことを気になったり、金さんにミツを見つけてもらったりする。もちろん、「ぼく」のミツに対する認識変化は「長い年月」を経て成り立ったものである。が、「ぼく」の発言や行動からはっきりとその認識変化が読み取れる時点を取り上げることにした。

二．一．YからY'へ

貧しい学生生活を支えるためにバイトをしなければならないが、まともなバイトが見つからず、「あんまりまじめ」ではない金さ

んに頼る。学生である私にとって金さんが紹介する裏の世界が衝撃的であることが以下の引用から分かる。

「イッパツやるか。これだよ。はじめ、イッパツ。これだよ。」

（略）だが話しをきいている内に、ぼくは段々、憂鬱になってきた。手記（一）

（中略）

ふしぎに、もう、ぼくには欲望はなくなっていた。その代りにこの娘の切ない懸命さがなぜか、ぼくらしくもない憐憫と悔いとに似た感情をこみあげさせたのだ。俺は最低の人間だな。もし、今、この女の好意を自分の欲望のために利用すれば、俺は最低な人間になるな。手記（三）

「あの女たちにはすけべがいるからな。すけべだなあ。」

（略）いくら落ちぶれたバイト学生だってそんな仕事をあてがおうとは金さんひどすぎる。

（しかし、結局、彼の眼には俺もそんな人間にみえるかもしれん。）手記（三）

バイトを与えてくれた金さんから「若いオンナ」を「手に」入れるために「イッパツ」が大事だという①安っぽい「話をきいている内に、ぼくは段々、憂鬱になって」くることや②「ぼく」がミツに初めて会った時、彼女を「ものにする」チャンスがあるのに「もし、今、この女の好意を自分の欲望のために利用すれば、俺は最低な人間になる」と相手のことを考える心を持つことや③金さんに質の悪い仕事が当てられた時、そんな人間でもないのに金さんの「眼には俺もそんな人間にみえるかもしれん」と思うこと等からミツを「ものに」して棄てる冷酷な「ぼく」とは違う「ぼく」が伺える。つまり、金さんのバイトを始める前の吉岡には下品な話や女性の体目当ての仕事に対するいくらかの抵抗があり、貧しいながらも最低限のモラルを持ち合わせている姿が窺える。が、金さんや金さんに与えられたバイトで知る亀田さんやジャンパーの男たちに会ってから段々この姿に微妙な変化が表れるのでそれを以下で考察したい。

（俺もおちたもんだな。）とぼくは心のなかで呟いた。（おちたもんだよ。）

（中略）

「イッパツ、君がおどろくことだ。」

こんな言いかたをしたのは、突然金さんがあの夜しゃべった言葉を心に思いうかべたからだ。バッカだなあ。バッカだよ。手記（二）

金さんに会って彼の片言の日本語の影響で「こちらの言葉まで

変になりそうだった」というように、金さんの口調までもが無意識にうつってきている。金さんの口癖とも言えるような「イッパツ」や「バッカだな。バッカだよ。」という言葉を「ぼく」がミツに初めて会った時無意識に真似し、使っている。

さらに、一週間後同じ「ぼく」はミツの好意を利用し、「ものにする」のである。この一週間以内に何が変ったかというと「ぼく」は金さんの紹介でジャンパーの男や亀田さん等のいる「常識では考えられぬ」裏の世界を知ってしまうということである。つまり、「ぼく」が今まで目を向けていなかった別の世界の存在を知ってしまうのである。その世界を知った「ぼく」は、以上見てきた「ぼく」と違う。

> 枕に顔を伏せ、ぼくは相手にきこえぬように小声で笑った。ほれみろ、案外、うまくいったじゃないか。しかし、お前もわるい奴だな。わるい奴だよ。本当に悪人だな。だが、人をひっかけ利用するのは俺だけじゃないぜ。金さんだってジャンパーの男だってそうじゃないか。いやチョボ髭の亀田さんだって同じことをしているじゃないか。今はみんながそうやっているんだ。やらない奴は今の世の中じゃ損をするのさ。
>
> 手記（三）

金さんの口調のみならず「ぼく」は知らず知らず金さんやジャンパーの男等の世渡り上手な生き方を学び、少なからず影響を受けていた。さらに、「金さんだってジャンパーの男だってそうじゃないか」、「今はみんながそうやっているんだ」と世間の中でそう「やらない奴は」「損をする」という価値観を金さんたちに会ってから受け入れるようになるのである。「ぼく」はこの価値観を後々も持ち続けるのである。「ぼく」のこの考えは金さんにその後のミツの状況が知らされたとき、「人生には人がよいだけで、坂道の傾斜をわざわざころげる連中がいる。不器用で要領がわるくて、損得の観念が結局よくつかめぬ連中だ。ミツはきっとそんな一人なんだろう」や「なぜ、もう少しうまく俺のように毎日を渡れないんだろう」とミツに対して「ぼく」が思うこと等でも表されている。

二．二．Y'からY"へ

「ぼく」は二回目の逢引でミツをものにし、「犬ころのように棄ててしま」う。ミツと性的関係が終わり次第自分と関係のない「赤の他人」と捉える「ぼく」は、現時点で彼女のことを「聖女」だと思っている。ミツを利用した時点で「犬ころのように棄て」たつもりの「ぼく」が決して彼女の存在を自分の中から消すことができず、「手記」を書く現時点に至っている。もし、「ぼく」がミツを棄てることができていれば、現時点で「手記」を書くなど、しないのではないか。つまり、回想内の出来事で現時点から十年前に、スール山形の手紙を読んで激しい衝撃を受け、長い年月（約十年ほど）が経つにつれ「ぼく」の認識上明らかな変

化が表れている。以下その変化を考察したい。

なぜあの時、年賀状を送る気になったのだろう。自分が今、にぎっている幸福に比べて、川崎で会ったミツの姿が、あまりに惨めで、可哀想だったからかもしれない。たしかに、あの時の気持には、あの娘にたいする憐憫の情がふくまれていた。それは一時的な衝動ではあったが、憐憫は憐憫にちがいなかった。

返事はこなかった。いや、もらわないほうがよかった。もらわないほうがこちらには心理的にも助かったのである。

（中略）

読みながら、受けた驚きや衝撃のことは、ここで触れない。ただ始めの一枚を幾度も読み返さねば、よくその意味がつかめないほど、頭が混乱したことは言っておかねばならぬ。手記（七）

自ら「憐憫」のためミツに年賀状を書くにもかかわらず、その返事は「ないほうがよ」くて、「心理的にも助かった」と言うのである。それは、ある種のうしろめたさを抱きつつ、返事がないことはミツに嫌われたとし、安心感を得ようとしている吉岡の心情を表していよう。「赤の他人」として「犬ころのように」棄てたミツのことを「聖女」と思うようになる切っ掛けはスール山形からの手紙である。しかし、スール山形からもらった手紙の内容は全く意外で「始めの一枚を幾度も読み返さねば、よくその意味がつかめない」とのべている。「ぼく」が理解できない最初の一枚に書いてあることは次のことをさしていよう。

私たち修道女は、正直な話、こういうミッちゃんの気持を、一時的な衝動か、感傷のように考えていました。我々修道女の言葉に、愛徳の実践というものがあり、この愛徳の実践に、修道女は生きようと心がけておりますが、愛徳は感傷でも、憐憫でもございません。私たちは、悲惨な人や気の毒な方を同情しますが、同情は、本能や感傷にすぎず、つらい努力と忍耐のいる愛ではないと、教わってまいりました。だからミッちゃんの気持も、病気でない幸福な人間が、病気に苦しむ患者に当然、感じる一時的な感情にすぎないのだろう、と思ったのです。手記（七）

スール山形のこの言葉を理解できなかった理由は「ぼく」の愛の理解はこれと全く違うものであったからであろう。そのため、「ぼく」のプロポーズにマリ子がうなずいたとき「胸の奥底からみたされた自尊心の悦び」を感じるのと同様に結婚式で社長に親族と言われることによってマリ子と結婚する実感が「ぼく」にわいてくるのである。つづいて、「ぼく」の「現代における愛情にはエゴイズムを、ぬきにして考えるのは不可能だ」という考えか

ら「ぼく」の「愛」の理解が明かされているのである。そのような「ぼく」にとってスール山形のいう「つらい努力と忍耐のいる愛」を超え、さらに次元の違うミツが実践していた「愛」をすぐに理解できるはずがない。その「意味がつかめない」が、その手紙を長い間見つめなければならないほど、激しい衝撃を受けたのも事実である。そのために、ミツのことを何度も繰り返し考え、その生き方から学んだことのために彼女を今「聖女」と思うようになっている。つまり、ミツの人生から「ぼく」が強く影響をうけ、その痕跡が現時点での「ぼく」に色濃く残っている。「ぼく」におけるミツの痕跡を後ほど第四章で取り上げる。その前にミツの人生はどのようなものであったかを考察したい。

三．人生という「坂道」を生きるミツ

以上二章で「ぼく」はミツに対する認識上、大きな変化を成し遂げていることを論じてきた。その「ぼく」に残されたミツの痕跡の真実性を見るためにまずミツの人生とはどのようなものであったのかを考察する必要がある。そのため、以下、ミツの人生を考えたい。

三．一．〈坂道〉のモチーフ

子供好きで、また子供のような書き方をするミツの人生が彼女にとって非常に辛くて、苦しみ・悲しみのある、まるで険しい〈坂路を登る〉ような人生として描かれている。母親に死なれ、実家を出て東京にくる。職場もあまり好ましくないところで、ほんの少しの悦びを流行歌や映画に見つけ出す。吉岡が悲しむから大変痛くても「あんなこと」をしてしまう。それから吉岡と一切連絡が取れず、吉岡に嫌われたと思い、次から次へパチンコ屋やソープや酒場等で大変辛い思いをしながら生き続ける。さらに、「ハンセン氏病」と診断され、自分の人生を振り返り、悪いことを一切したことがないのになぜ自分が苦しめられるのか理解できない。「ハンセン氏病」だと知って激しい衝撃を受け、病院を出た時点で彼女の人生を象徴するかのように次のような描写がある。

「鉛筆のように黒く光った一本の坂路が、まっすぐ伸びている。蝙蝠傘を手にもち、風呂敷包みをかかえたミツは、その坂路の途中で足をとめた」アザ（二）

既に、著しく苦痛に満ちた人生を送ってきたミツは、今後さらに苦悩を生き抜いていかなければならない。「これ以上、落ちるはず」のない「不幸のどん底に落ちた」が、複雑なことを理解できないミツなので、病院での非常に辛かったこともただ「イヤだったな…」としか言い表せないのである。その辛さの度合いが以下の文章からはっきり読み取れる。

突然胸の底から、そうミツの小さな胸の一番ふかい奥底から、言いようのない悲しみがこみあげてきた。この霧雨の降

る新宿の人ごみの中で、――いや、人生とよぶ路の中で、自分が全くひとりぼっちであり、ひとりぼっちであるだけではなく、病んだ犬よりももっとみじめで見棄てられていることを彼女ははっきりと知った。アザ（二）

ここで、人生が路とたとえられていることを重視すべきである。これはミツの認識であるが、「手記」にも度々だるそうに坂道を登る女が出る場面からも、この作品全体におけるモチーフになっているといえよう。また、『人間が・棄てた・イエス』というダブルイメージを託した作家はここでイエスが十字架を背負ってゴルゴタの坂路を登るというダブルイメージを託していると言っても過言ではない。なぜならば、この作品において吉岡がミツを犯す場面では「だるそうに」〈坂路を登る〉ある中年の女が吉岡及びミツ両方の認識に強く入っていることが以下の引用からもわかるようにこの作品においてモチーフとして何度も繰り返し語られているからである。

坂路を傘をさした女　が一人、だるそうにのぼっている。手記（三）（注：「ぼく」の認識）

行った渋谷の旅館、湿った布団、坂道をだるそうに登る女。雨。それらの人間の人生を悲しそうにじっと眺めている一つのくたびれた顔がミツに囁くのだ。アザ（一）（注：全知視点の語り手の意識）

あの日も雨で、その旅館の窓から、坂路をだるそうに歩いている中年の女の人の姿がみえたのを憶えている。アザ（四）（注：ミツの意識）

雨の中を、ふとった中年の女が、だるそうに歩いていた。これが人生というものだ。手記（七）（注：「ぼく」の認識）

「手記」内の出来事の一番最後に吉岡が手紙を読み終えて、だるそうに〈坂路を登る〉女のことを思い出し、「これが人生というものだ」とはっきり断言するのである。つまり、この作品において、「ぼく」とミツはもちろん、全知視点の語り手の意識にまで「人生」と「坂路」と「だるそうに登る」行為が密接に結び付けられている。さらに作品における重要な場面、つまり「ぼく」がミツを「ものに」する場面やミツが誤診をうけるときや複雑なことが理解できないミツでもはっきりと「見棄てられている」ことを知る場面や、吉岡がスール山形からの手紙を読んで激しい衝撃を受ける場面などにこのイメージが繰り返し使われている。つまり作品全体におけるモチーフになっている。このモチーフを使用することによって実に作家遠藤が巧みにイエスのダブルイメージを活用している。また、題名『わたしが・棄てた・女』を作家の言う『人間が・棄てた・イエス』と被せてみれば、ミツが「ぼ

く」に〈人生〉を示したようにイエスが人間に〈人生〉を示した等のような多様の読みが可能になる。遠藤文芸においてこのようなところこそ度々議論を巻き起こす種になり、また遠藤文芸の魅力の一つでもある。

作品内の話しに戻ると、辛い〈坂路を登る〉ような苦しい人生を生き延びたミツは「小さな胸」に収めている心が「非常に丈夫」なため、辛くても彼女がどうにかその悲しい・苦しい人生を生き抜くことができる。それだけではなく、彼女が辛い自分のことまで忘れて自分の不幸を他の人の不幸と結び合わせ、何かしてあげられないかを一生懸命に考えるのである。この相手に対する〈他人〉扱いではなく、「愛」や〈連帯感〉を持つミツの生き方がスール山形の手紙を切っ掛けに「ぼく」に伝えられ、現時点での吉岡に強く影響を与えている。

三．二．自発的に愛徳を実践するミツ

苦しい人生を生き抜いたミツだが、それでも苦しい人生を自分以外の周りの人も送っていることにいつも気付く。辛い努力をしてカーディガンのために溜めたお金を田口さんの奥さんに渡すことや、誤診が判明してからも病院に残って患者の世話をすることなどその例に当る。それでも、苦悩を耐えられず、最終的にスール山形のいう神に対して「なんのために、あんなに苦しまされ」るのかと問いかけずにはいられない。

自分だけがなぜこんなに辛く、不幸でなければならないのか。

（中略）「あの人たち、いい人なのに、なぜ苦しむの。だってさ、こんなにいい人たちなのに、なぜこれほど可哀想なめに会うのよ」

「あたしも、その問題を毎晩、考えるわ」（中略）そんな時、あたしは自分が信仰している神さまのことまで、わからなくなる時もあるの。……でも、あとになって考えなおすのよ。この不幸や泪には決して意味がなくはないって、必ず大きな意味があるって……」（注：スール山形）

「そうかなあ」アザ（四）

（なんのために、あんなに苦しまされたんだろう）

なぜ、こんな苦しみが自分にだけ与えられたのだろう。スール・山形はどんな苦しみもみんな意味があると思うと語っていたが、しかしミツの小さな頭にはそんな理屈はわからない。

（中略）

マリ子を羨む気持は毛頭なく、ただ自分の住む世界と彼女の世界とは生れつき違うことを彼女はぼんやりと感じていた。アザ（五）

吉岡に棄てられ、ソープやパチンコ屋や酒場のようなところで働き、ハンセン氏病の誤診を受け、吉岡の結婚相手であるマリ子と「生まれつき違う」運命を持っているミツが人生を〈坂路を登る〉ように生きる。複雑なことを理解できないミツはなぜ「自分だけがこんなに辛く、不幸でなければならないのか」と問いかける。ミツは辛さのあまりに一瞬マリ子や周りの人みんなが、「自分と同じように不幸になればいい」と思うが、落ち着いたときマリ子を「羨む気持ちは毛頭なく、ただ自分の住む世界と彼女の世界とは生まれつき違」っていたと感じる。マリ子に対する自分の気持ちは深く根付いているわけでもないが、病院で目の前に壮ちゃんという小さい子供までが不幸になるのは彼女に耐えられない。

「あたし、神さまなど、あると、思わない。そんなもん、あるもんですか」

「なぜなの？壮ちゃんが死んだから？あなたの願いを、神が、きいてくれなかったから？」（注：スール山形）

「そうじゃないの。そんなこと、今はどうでもいいんだ。ただ、あたしさ、神さまがなぜ壮ちゃんみたいな小さな子供まで苦しませるのか、わかんないもん。子供たちをいじめるのは、いけないことだもん。子供たちをいじめるものを、信じたくないわよ」

純真な小さな子供にハンセン病という運命を与え、そして死という結末しか呉れなかった神にミッちゃんは、小さな拳をふりあげているようでした。

「なぜ、悪いこともしない人に、こんな苦しみがあるの。病院の患者さんたち、みんないい人なのに」手記（七）

なぜ罪のない人間までも苦しむのかというミツの問いに対して作品内では作家がはっきりした答えを明示しない。が、スール山形が「必ず大きな意味がある」というが、ミツはそれが納得いかない。しかし、答え自体はでないが、それでも、スール山形が言うようにミツは知らず知らず人に自分を結び合わせてきた。つまり、スール山形の言うように彼女は「愛徳の実践」を行ってきた。ミツのその生き方を以下みてみたい。

坂路を肥った女の人がくたびれたように登っていた。そしてあの時ミツは非常に悲しく怖しく、非常に痛かった。もし吉岡さんにきらわれないですむなら、「あんなこと」はしたくなかった。しかし吉岡さんは、「あんなこと」をミツがさせなければ自分を愛していないんだと言ったんだ。そう言われればミツはどうしてよいか、わからなくなった。吉岡さん

がそんなことのために悲しい思いをしなくてもよいならと、彼女は考えてしまった。もともとミツは子供の時からなぜか、だれかが不倖せな顔をしているのを見ると、たまらなくなるのだ。ましてその不倖せな顔が自分のためであると、もう耐えられなくなる。

（中略）（ねえ。引きかえしてくれないか……お前が持っているそのお金が、あの子と母親とを助けるんだよ）（注：ミツが聞く誰かの声）

（でも）とミツは一生懸命、その声に抗う。（でも、あたしは毎晩、働いたんだもん。一生懸命、働いたんだもん）

（わかってるよ）と悲しそうに言う。（わかっている。わたしはお前がどんなにカーディガンがほしいか、どんなに働いたかもみんな知ってるよ。だからそのお前にたのむのだ。カーディガンのかわりに、あの子と母親とにお前がその千円を使ってくれるようにたのむのだよ）（イヤだなア。だってこれは田口さんの責任でしょ）（責任なんかより、もっと大切なことがあるよ。この人生で必要なのはお前の悲しみを他人の悲しみに結びあわすことなのだ。そして私の十字架はそのためにある）

その最後の声の意味をミツはよくわからない。だが、風にふかれた子供の口もとに赤くほれていたデキモノが、彼女の胸をしめつけてくる。だれかが不倖せなのは悲しい。

地上の誰かが辛がっているのは悲しい。だんだんと彼女にはあのデキモノが我慢できなくなってくる。アザ（一）

ミツが自発的に自分を不幸せな人と結び合わせる例がこの作品に他にも幾つかある。ミツが聞く声が「責任なんかより、もっと大切なことがあるよ」というのである。もちろん、ミツ自身はその意味がよく分からないが、自発的に不幸な〈他人〉に対して無関心ではいられないのである。スール山形がいうように彼女の行為に「わざとらしさが少しも」なかった。ミツの本来の姿は、理屈などとは関係なく、不幸な人を見ると自然にその人を助けたくなり、正否や責任など複雑なことと縁のない、流行歌や映画などが好きな「平凡な娘」である。

スール山形にとってミツは知らず知らず「愛徳の実践」を行ってきた人だが、それはミツ自身の認識ではないことを見逃してはならない。ミツが認識していないからこそ、「わざとらしさ」なしにそのような慈悲の行為を成し遂げるのである。つまり、ミツが相手に対して憐憫や慈悲を感じることなどは自発的かつ素直な行為である。

以上みてきたようにミツは不幸な人に何の選別もなく自分で何

かしてあげられないかと考えずにはいられなくなり、同伴者のように相手に付き添い続けるような存在である。彼女は責任などに囚われず、無関係な「他人」でも不幸であれば無関心ではいられず、自分を相手に結び付ける心の持ち主である。

二章で吉岡がミツの影響で変化を成し遂げていると論じたが、そのミツの痕跡が現時点での「ぼく」にどう残っているのかを次の章で考えていきたい。

四．「ぼく」におけるミツの痕跡

「ぼく」の認識においてミツが「赤の他人」から「聖女」に変ることは、「ぼく」の中に残されたミツの痕跡が「ぼく」に相当な影響を及ぼしているということだろう。そのため現時点の「ぼく」は十年前の「ぼく」に比べてある種の変化を成し遂げているが、それは数少ない例でしか示されていない。なぜなら、「ぼく」に残されたミツの痕跡を見るために「手記」を書いている現時点での吉岡の認識をみなければならないが、「手記」のほとんどは回想であり、現時点での彼の認識は限られたところでしか述べられていないからである。その一つは現時点での認識ではないが、スール山形の手紙を読み終えた時点で早くも「この寂しさは何処からくるのだろう」と問い始めることである。これは、前から寂しさを感じながらもそれを誤魔化すような吉岡とやや違って、初めてその寂しさの根源に眼を向けるような彼の変化を表している。

もしミツがぼくに何か教えたとするならば、それは、ぼくらの人生をたった一度でも横切るものは、そこに消すことのできぬ痕跡を残すということなのか。寂しさは、その痕跡からくるのだろうか。そして亦、もし、この修道女が信じている、神というものが本当にあるならば、神はそうした痕跡を通して、ぼくらに話しかけるのか。しかしこの寂しさは何処からくるのだろう。

ぼくの心にはもう一度、あの渋谷の旅館のことが起ってきた。蚊を叩きつぶした痕のついている壁。しめった布団。そして、窓の外に雨がふっていた。雨の中を、ふとった中年の女が、だるそうに歩いていた。これが人生というものだ。そして、その人生をぼくは、ともかく、森田ミツという女と交ったのだ。黄昏の雲の下に、無数のビルや家がある。バスが走り、草がながれ、人々が歩きまわっている。

ぼくと同じように、ぼくらと同じように……手記（七）

以前「沢山の人生だな。色々な人生だな。」と色々な人生があることを認めることに「ぼく」の認識はとどまっていたが、手紙を読んで初めて人生の内実や神について考えるようになる。そのため、スール山形の手紙を読み終えて「雨の中を、ふとった中年の女がだるそうに歩いていた」のを思い出し、「これが人生とい

うものだ」と感じるのである。さらに、それまで「赤の他人」だったミツに対して、「その人生をぼくは、ともかく、森田ミツという女と交わった」と認め、初めて意識的に決して消すことのできないミツの存在と自分を結びつけるのである。ミツだけではなく、「ぼくと同じように、ぼくらと同じように…」人生を持っている回りの人たちに対してもある種の〈連帯感〉を感じる。これは、遠くからただ色々な人生の存在を認める傍観者のような「ぼく」と違って、初めて自分と他人を結び付け、「ぼく」から「ぼくら」に目を向けるような変化であるといえよう。

ミツと逢引したときはまだ〈愛〉を理解できなかったのだが、現時点での「ぼく」はミツが示した〈愛〉を理解できるようになっている。現時点の「ぼく」の考えが次のような文章で表されている。

夜の黒い風が道玄坂のもう戸を閉じた商店と商店とのあいだを吹きぬけていく。その坂の上から一組、二組、夜の飲屋で働いている女たちが着物の裾を押えながら足早やに駅の方向に駆けていく。紙屑がそのうしろから転がっていく。彼女たちが家路にむかうためになぜ小走りに駅に駆けていくのかをあの時、考えるだけの心があれば、ぼくは自分の前にしおれて立っているミツのことも理解できたはずだ。あの渋谷の女たちにだって男や赤ん坊があり、愛があるから着物の裾を押えながら黒い風のなかを駆けおりていくのだとぼくはまだわかっていなかったのだ。手記（三）

この文章から「ぼく」が罪を意識している可能性があることを考えてもおかしくはないが、ここの発言を罪意識と捉える場合は「手記」にある他の現時点での発言とは矛盾することになってしまう問題がある。「手記（四）」に「ぼく」の現時点での考えを表す次の言葉がある。

とは言え、ぼくは人並以上に自分が腹黒く、狡猾な男だったとは思ってはいない。ぼくがミツにやったことは、男ならば大半は形こそちがえ一度か、二度は経験のあることだろう。三浦マリ子に気に入られ、社長からよく見られようと考えた功利的な気持だって、普通のサラリーマンならばだれだってよく知っている感情なはずだ。

要するにぼくは決して人格の立派な男ではなかったが、しかし、そんなひどい人間でもなかった。ぼくは東京に住む無数のサラリーマンの一人にすぎなかったし、無難な、風波のない、平凡な人生しかねがっていなかったのである。手記（四）

もしも、この発言を「ぼく」が罪を意識しているがために口にし、さらにミツのことを「聖女」と思っていながらも、ミツを

「犬ころのように」棄てた自分をどうしても「ひどい人間でもなかった」と思うのであれば、現時点での「ぼく」が偽善の「罪意識」を持っているということになるか、あるいは罪意識などを超え、別の、より大事なものに目を向けていることになろう。前者の場合は「手記」の語り手が自分であり、ミツと自分の間に起こった出来事を「ぼく」しか知りようがないため、読者の同情を得るようにより良い自分を表に出したはずであろう。しかし、ミツを「理想の女」と考え、「長い年月」で〈愛〉や〈人生〉などの意味を理解した冷静な「ぼく」が尚更自分の過去を弁解しようとしないだろう。先行論に「確かにミツに対する罪悪感があることは認められるが、ここで語られる「寂しさ」は、他者を軽んずる〈罪〉だけに留まるものではない。[8]」とある。ミツに会う前から「ぼく」が「寂しさ」を感じていたため前半部分は同意しないが、後半の「〈罪〉」を超えているという指摘には同感である。むしろ、ここで窺えるのは自分の過去を冷静に認めたうえで、ミツが示した〈人生〉を真面目に生きようとしている「ぼく」の姿であろう。過去の「ぼく」は「無数のサラリーマンの一人」に過ぎず、今の世の中で「ぼく」がミツにしたようなことは「誰だって」「ぼく」と同様に平気でしていると考えていたと現時点での「ぼく」は認識している。このように自分が持っていた考え方が極めて例外的なものでもなく、金さんやジャンパーの男たちも含め、この世の中でありふれたものとして「ぼく」は理解している。「うまく」「毎日を渡れ」ているつもりでいた「ぼく」だが、ミツによってその概念がひっくり返されたのである。

そこで、このような発言から「ぼく」を「罪悪感」や「罪意識」に苛まされている人間というレベルで留めてしまうと、この作品における一層より大事なものを見失ってしまう可能性が高い。なぜなら、現時点での「ぼく」にとって責任などを問題にしてもどうしようもないからである。作品内に「ぼく」が散髪屋で雑誌を見つけ、その中に文化人の女史が自分と同様に、ある男性がある女性を捨ててしまい、その女性に対してアドバイスをする欄を読む。文化人の女史がその女性に「愛される資格のない、無責任な男」という平凡な社会における〈愛〉の理解に関して「もっともらしい回答をのべていた」。が、それに対して、「ぼく」は「毒にも薬にもならない屁理屈をいってやがる」と思うのである。不意にもこの時点で「ぼく」が後ほど耳元に聞く誰かの声と響くようなことを口にしている。また、ミツも「僕」と同じく、しかし離れた時点で別の声を聞いている。カーディガンを買うために溜めたお金を田口さんの奥さんに渡すかどうかで悩まされ、次の「ミツではない別の声」を聞く。

（注：別の声）（責任なんかより、もっと大切なことがあるよ。この人生で必要なのはお前の悲しみを他人の悲しみに結びあわすことなのだ。そして私の十字架はそのためにある。）アザ（一）

不思議にも、ミツに最後に会う前に「ぼく」も、似たようなことを自分ではなく、誰かの声できく。

（俺の責任じゃないぜ。）とぼくは首をふった。（一つ一つ、そんなこと気にしていたら、誰とも会えないじゃないか。毎日を送れないじゃないか。）

（注：誰かの声）（そりゃそうだ。だから人生というのは複雑なんだ。だが忘れちゃいけないよ。人間は他人の人生に痕跡を残さずに交わることはできないんだよ。）手記（一八）

ミツも「ぼく」も似たようなことを自分ではなく、別の誰かの声で聞く。さらに、お互いが似たようなことをある声で聞いていることは知らないのである。ここで重要なのはそれぞれ離れても、二人とも同じ「責任」や「痕跡」についてその声と抗うところである。空間も時間も離れていながらも、二人の主人公、また作品全体を占める「手記」と「アザ」両方の部分において同じ言葉が繰り返されるということは、それだけこの作品におけるその役割が非常に重要であるということであろう。

つまり、現時点での「ぼく」の着眼点は「罪意識」や「責任」などにあるより、ミツの存在が自分に残した痕跡のほうにあると言って良いだろう。「罪意識」の先にやはり「責任」があり、「責任」などに囚われてしまうということは、「もっと大切なこと」を見失ってしまうということであろう。

そうすれば、「ぼく」の「誰でもやっている」のような発言は弁解のような言葉より、自分が一人の平凡な人間であり、自らの限界を素直に認めているように読める。さらに、「ぼく」の他の発言とも矛盾せず、「手記」を超えて作品全体とも綺麗に調和を保つのではないか。また、作家の言葉、「平凡な彼女（注：ミツ）がどのように崇高な領域に進んでいった」かに対しても「ぼく」とミツの間の差をはっきりさせる役割も出来るのである。言い換えれば、「ぼく」から自分が腹黒い、酷い人間であったのような重たい後悔を伴う発言のほうがむしろ読者の同情を引き起こし、ミツの次第に達成した崇高な領域、またその聖なる地点にいるミツに対して「ぼく」のいる〈平凡な〉一般社会との間の距離が縮まってしまう効果にもなろう。

ミツのことを「聖女」や「理想の女」と思うようになり、「ぼく」とミツの間にある埋められない隔たりを素直に認める態度のほうが相応しいであろう。つまり、「ぼく」は自ら平凡な人間の一人としての「ぼく」の限界を認め、その中にでもミツの生き方に少なからず目を向けている。

付記：本文の引用は『遠藤周作文学集第五巻』（新潮社　一九九九年八月六日）に拠った。

注

（1）山根道公『遠藤周作文学全集　第五巻』解題（新潮社　一九九九年八月六日）

（2）注（1）に同じ
（3）遠藤周作の世界　遠藤順子さんに聞く「夫からの贈り物」、Ongakuza Musical Magazine, 特別号（アールズ）、二〇〇六年六月
（4）笠井秋生「「わたしが・棄てた・女」について―人間の無意識領域にかくれている〈本当の自己〉―」（『遠藤周作を読む』梅光学院大学公開講座論集 第52集、佐藤泰正（編）二〇〇四年五月三一日）
（5）川島秀一「想像力の始原―『わたしが・棄てた・女』の定位をめぐって―」（「遠藤周作研究」第一号、二〇〇八・九）
（6）林水福「『わたしが・棄てた・女』における神と罪」（「日本文芸論叢」第六号昭和六三年三月三一日発行）
（7）佐古純一郎「『わたしが・棄てた・女』」（『遠藤周作――その文学世界』編者 山形和美、一九九七年一二月一三日　初版発行）
（8）大城早月「遠藤周作『わたしが・棄てた・女』論」―吉岡努の内面に着目して―（「論究日本文學」、立命館大学日本文学会、第九七号、二〇一二年十二月発行）